

★私の所感
 ・主に平安末期～室町時代末期の武将を取り上げている。とりわけ源平及び南北朝時代の武将が多い。江戸時代当時、まだ生臭い戦国武将は対象外か。北条氏康が一番新しい。仙台版元の菅原屋は伊達政宗を入れたかったかもしれない。
 ・徳川家康は清和源氏の末裔を名乗っていたが、本双六では源氏のみならず、源平合戦で活躍した平氏の武将も取り上げている。
 ・前九年の役で活躍した清原武則が「上がり(頼朝)」の近くに位置づけられていることは、仙台版元らしいマーケティングである。
 ・上がりは、家康を除けば頼朝しかあり得ないだろう。
 ・朝廷を援けた南朝の武将が多い。
 徳川家康は、清和源氏系征夷大將軍であり、藤原家(北朝)と言われている。しかし、幕末には藤原式家(南朝・桓武平氏系)の巻き返しが始まり、徳川光圀を調略し、水戸徳川家の抱え込みに成功する。この双六は、幕末に作成されており、南朝色が強いというのうがち過ぎか。

武者名	年代	解説	時代
菊池武光	1319年～1373年	南北朝の戦乱時代に征西將軍宮懷良親王を奉じて活躍した南朝の武将である。菊池氏第15代当主。第12代当主菊池武時の子。	鎌倉 南北朝
北条長氏 (北条早雲)	1432年～1456年	北条長時＝北条早雲。江戸時代は、長氏または氏茂などと伝えられてきた。現在では盛時(もりとき)が定説となっている。通称は新九郎。号は早雲庵宗瑞。駿河の今川氏を頼って次第に頭角を現した。のち堀越公方(足利茶々丸)を倒して伊豆韮山(にらやま)に進出、小田原を本拠として南関東制覇の基礎を築いた。家訓に「早雲寺殿廿一條条」がある。	室町
細川 頼之	1329年～1392年	足利尊氏にしたがって南朝方とたたかう。貞治6～正平22年幕府管領(かんれい)となり、幼少の將軍足利義満を補佐した。のち諸將にうとまれて失脚。晩年復帰し、明徳の乱の鎮定につくした。	鎌倉 南北朝
北条氏康	1515年～1571年	関東の戦国大名。後北条氏第三代当主。北条氏綱の長男。子に氏政・氏邦ほか。軍事・外交・内政共に優れる相模の雄。。関東から山内・扇谷両上杉氏を追うなど、外征に実績を残すと共に、武田氏・今川氏との間に甲相駿三国同盟を結び、上杉謙信を退け、後世につながる民政制度を充実させるなど、政治的手腕も発揮した。	室町 戦国
畠山基国	1352年～1406年	南北朝時代から室町時代の武将・守護大名。明徳の乱などで功をたて足利義満の信任をえ、応永5年(1398)管領(かんれい)となる。以後、斯波(しば)・細川両氏とともに三管領といわれた。6年応永の乱を平定し、紀伊(きい)守護をかねて、越中、河内(かわち)、能登(のと)、紀伊4か国を領国とした。	南北朝 室町
源頼政	1104年～1180年	平安時代末期の武将・公卿・歌人。摂津源氏の源仲政の長男。平氏が専横を極める中、それまで正四位下を極位としていた清和源氏としては突出した従三位に叙せられたことから源三位と称された。保元の乱、平治の乱で勝者の側に属し、戦後は平氏政権下で源氏の長老として中央政界に留まった。平清盛から信頼され、晩年には武士としては破格の従三位に昇り公卿に列した。だが、平氏の専横に不満が高まる中で、以仁王と結んで平氏打倒の挙兵を計画し、諸国の源氏に平氏打倒の令旨を伝えた。計画が露見して準備不足のまま挙兵を余儀なくされ、平氏の追討を受けて宇治平等院の戦いで敗れ自害した(以仁王の挙兵)。	平安
桃井直常	生年不詳～1376年	足利尊氏に従い、延元元年/建武3年(1336年)頃に下野・常陸で北畠顕家と合戦したことが史料上の初見である。貞和元年に桃井直常は、能登国に移った吉見頼隆とともに、新川郡で前越中守護松倉城主井上俊清と交戦、高月(滑川市)で勝利する。足利尊氏に従い、京都六波羅探題を攻め落とす。足利尊氏が天皇に背いても尊氏に従う。後に足利尊氏と弟の足利直義が不和となり、足利直義は南朝側に寝返った。これに従い桃井直常も足利尊氏に反旗をひるがえした。江戸時代になってから作られた伝承によれば、直常の孫(直和の子)に当たる桃井直詮は幸若舞の創始者とも伝えられる。	鎌倉 南北朝
和田義盛	1147年～1213年	平安時代末期から鎌倉時代初期の武将。鎌倉幕府の御家人で、初代侍所別当。三浦氏の一族で源頼朝の挙兵に参加。鎌倉に頼朝の初期武家政権がつかれると初代侍所別当に任じられる。治承・寿永の乱では源範頼の軍奉行となり、山陽道を遠征し九州に渡り、平家の背後を遮断した。平家滅亡後は奥州合戦に従軍して武功を立てた。頼朝死去後、梶原景時の変での景時弾劾追放では中心的な役割を果たし、その後の比企能員の変、畠山重忠の乱といった一連の御家人の乱では北条氏に与した。しかし、二代執権・北条義時の挑発を受けて挙兵に追い込まれ、幕府軍を相手に鎌倉で市街戦を展開するが、敗れて討ち死にし、和田一族も滅亡した(和田合戦)。	平安 鎌倉
平則経	1160年～1184年	平安時代末期の平家一門の武将。平教盛の次男。『平家物語』では、数々の合戦において武勲を上げ、「たびたびの合戦で一度の不覚も取ったことはない」「王城一の強弓精兵」と言われる平家随一の猛将であり、源義経のライバル的存在として描かれている。都落ち後、退勢にある平家の中でひとり気を吐き、水島の戦い、六箇度合戦、屋島の戦いで奮戦して源氏を苦しめた。最後は壇ノ浦の戦いの敗戦の中さんざんに戦い、源義経に組みかかろうとするが、八艘飛びで逃げられ、大男2人を締め抱えて海に飛び込んで死んだ。	平安
小山朝政	1158年～1238年	平安時代末期から鎌倉時代初期の武将である。鎌倉幕府成立後、朝政は下野守護をつとめ、大江広元らと並ぶ幕府宿老として幕府内に重きをなした。小山氏は代々下野国権大介職および押領使を世襲し、朝政は下野国日向野郷の地頭職に補任され、下野守護は鎌倉時代を通じ一貫して小山氏だった。つまり、下野国司と守護を兼ね、さらに朝政は常陸・播磨にも地頭職を、正治元年(1199)には播磨守護職をも獲得している。	平安 鎌倉
上杉憲実	1410年～1466年	室町時代中期の武将、守護大名。関東管領、上野・武蔵・伊豆守護。越後守護上杉房方の3男。関東管領を務め、足利学校や金沢文庫を再興した事で名高い人物である。	室町
三浦一族		三浦氏は、桓武平氏を血をひく坂東八平氏の一つ。為通が衣笠に居城を構え、代々源氏に仕えた。源頼朝の挙兵にも加わり、石橋山の戦いには間に合わなかったものの、頼朝の鎌倉入りに大きな役割を果たす。鎌倉御家人として重要な地位を占めていたが、北条氏との対立が大きくなり、泰村の代の滅ぼされた。傍流には、三浦義明の長男杉本義宗、八男の佐原義連、杉本義宗の長男和田義盛がいる。	平安 鎌倉
千葉常胤	1118年～1201年	源頼朝の挙兵に一族を率いて参加、幕府創設に功を成した。東国御家人の重鎮。保元の乱に源義朝に属し、1180年(治承4)9月、石橋山の合戦で敗れた源頼朝が房総に逃れるとこれに応じ、富士川の合戦で平維盛の軍を破った頼朝が上洛しようとしたとき、東国経営の重要性を説いてその後の幕府の創立に貢献。	平安 鎌倉

平広常	生年不詳～1183	平安末期の武将。平忠常の子孫。上総国権介(ごんのすけ)。安房国に逃れた源頼朝の下に二万騎を率いて参陣。佐竹氏追討などにも功があったが、謀反を疑われ梶原景時に誅殺された。	平安
平忠度	1144年～1184年	平安末期の武将。忠盛の子。清盛の弟。薩摩守。和歌をよくした。都落ちの際、詠歌百余首を師の藤原俊成に託し、一門とともに西走、一ノ谷で戦死した。忠度を討ち取った武将が首を取り、首を包もうとしたとき、一首の歌が書かれた紙を見つけました。「ゆきくれて 木の下かげを 宿とせば 花や今宵の 主ならまし」死に行く時も和歌を詠んでいった真の文武の将平薩摩守忠度の死は、敵、味方の関係なく、多くの人の涙を誘った。	平安
名和長年	生年不詳～1336	南北朝時代の武将。伯耆(ほうき)の豪族。1333年隠岐(おき)を脱出した後醍醐天皇を伯耆の船上山に迎え討幕軍に加わった。建武新政で因幡(いなば)・伯耆の守護、記録所・雑訴決断所の寄人(よりうど)となる。	鎌倉南北朝
楠正成	1294年～1336年	鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての武将。建武の新政の立役者として足利尊氏らと共に活躍。尊氏の反抗後は南朝側の軍の一翼を担い、湊川の戦いで尊氏の軍に破れて自害した。鎌倉幕府からは悪党と呼ばれた。明治以降は「大楠公(だいなんこう)」と称され、明治13年(1880年)には正一位を追贈された。	鎌倉南北朝
細川隆元	1430年～1473年	室町時代の武将・守護大名。管領、土佐・讃岐・丹波・摂津・伊予守護。足利氏の支流で三管領の1つである細川氏嫡流・京兆家の当主。1445年以後3度約20年にわたって管領を勤めた。将軍継嗣問題、斯波(しば)・畠山両家の家督争いなどから山名宗全と対立、応仁の乱(1430-1473)の東軍総大将として知られている。	室町
源義家	1039年～1106年	平安時代後期の武将。伊予守源頼義の長男。八幡太郎の通称でも知られる。後に武家政権鎌倉幕府を開いた源頼朝、室町幕府の足利尊氏などの祖先に当たること等から後世に英雄視され、様々な逸話が生み出される。比叡山等の強訴の頻発に際し、その鎮圧や白河天皇の行幸の護衛に活躍する。前九年(ぜんくねん)の役に功をたて、1083年陸奥(むつ)守兼鎮守府(ちんじゅふ)将軍となった。清原氏の内紛に介入して後三年の役を起し、朝廷に事後承認を求める。後三年(ごさんねん)の役の鎮定後は、私財をもって将士をねぎらい東国に源氏の基礎を築いた。その活動時期は摂関時代から院政時代に移り変わる頃であり、政治経済はもとより社会秩序においても大きな転換の時代にあたる。	平安
新田義貞	1301年～1338年	鎌倉末期・南北朝時代の武将。上野の人。元弘3=正慶2年(1333)鎌倉幕府を滅ぼし、建武政権から重用されたが、のち、足利尊氏と対立。兵庫で楠木正成(くすのきまさしげ)とともに九州から東上する尊氏と戦ったが敗れ、恒良・尊良両親王を奉じて越前金崎城によったが落城。のち、藤島で戦死。	鎌倉南北朝
清原武則	生年不詳 死没不詳	平安中期の東北地方の豪族。父は光方。出羽国仙北(古代の雄勝,平鹿,山本の3郡。秋田県)の「浮囚長」。平5(1062)年,前九年の役で陸奥守源頼義による安倍氏攻略に当たり,頼義から援軍の要請を受けたが当初,応じなかった。途中から3000の頼義軍を上回る1万の兵を率いて戦い,1カ月で勝利に導いた。この献身ぶりを頼義の子義家は「武則の忠によって朝廷の権威を保つことができた」とほめた。軍功によって翌年鎮守府将軍に任じられ,安倍氏の所領も手中にし,奥羽2国にまたがる清原氏の基盤を築いた。 ※清原氏と盛岡地域の歴史 平安時代の延暦年間、征夷大將軍・坂上田村麻呂により志波城が築かれ、大和朝廷による陸奥国最大にして最北の治府となる。続いて豪族安倍氏により「厨川柵・姫戸柵」が置かれて事実上の自治を果たすが、安倍氏が源氏からの侵攻を受けると、代わって出羽国から清原氏が進出した(前九年の役)。清原氏が内紛で滅亡すると(後三年の役)、現在の盛岡市(当時の岩手郡・斯波郡)は平泉を拠点とする藤原清衡ら(奥州藤原氏)の勢力圏となる。平泉が源頼朝に攻略され再び源氏が統治すると(鎌倉幕府の成立)、「厨川城」を拠点に御家人「奥州工藤氏」が治め、のちに岩手郡は北条氏・斯波郡は足利氏の影響下に置かれる。	平安
源頼朝	1147年～1199年	鎌倉幕府初代将軍。義朝の三男。平治の乱後、伊豆蛭ヶ小島に配流。1180年以仁王(もちひとおう)の平氏追討の令旨に応じ挙兵。石橋山に敗れ安房に逃げたが、東国武士の来援を得て関東を制しつつ鎌倉にはいつて根拠地とした。同年、平維盛の追討軍を富士川に破る。83年、東国支配を認める宣旨を得、ついで弟の範頼・義経を西上させ、85年壇ノ浦で平氏を討滅し全国を平定。その後、義経追討を口実に全国に守護・地頭を設置、武家政治の基礎を確立。92年征夷大將軍に任ぜられた。	平安鎌倉

<参考> 前九年の役 後三年の役

◆前九年の役 坂上田村麻呂が蝦夷を討伐した801年以降、陸奥ならびに、陸奥国の奥六郡は比較的平穏を保っていたが、11世紀ころになると奥六郡の俘囚(中央に帰属した蝦夷)である安倍氏が勢力を伸ばし「奥六郡」を実効支配した。1051年安倍氏が、国司に従わず衣川の柵を越えて勢力圏を拡大しようとした事に起因して始まった戦いが「前九年の役」である。陸奥守として赴任した源頼義と嫡子義家を最初は何度も破ったものの、1062年に出羽国仙北の俘囚清原氏が参戦する事で形勢が逆転。安倍氏は滅亡した。戦後処理において頼義が意に反して陸奥守ではなく正四位下伊予の守となり、清原武則が戦功で朝廷から従五位下鎮守府将軍に補任され、奥六郡を与えられ、清原氏が奥羽の覇者となった。この役において安倍氏に帰属した藤原経清の妻であった安倍頼時の息女は清原武貞の妻となり、藤原経清の遺児(藤原清衡)共々清原氏に引き取られた。藤原経清の遺児である藤原清衡を養子にした事は、未だ残る安倍氏への勢力への配慮があった物と考えられるが(嫡子と同様に扱った)、この複雑な跡目構造が後三年の役の伏線となってしまふ。実質1051年—1062年までと12年間に渡る戦いであるが、前九年と呼ばれている。

◆後三年の役清原武貞には嫡子「真衡」、養子の「経清」、嫡子だが母は安倍頼時の息女「真衡」といた。武貞の死後、清原氏は真衡が跡をとった。源義家は陸奥守として再び陸奥に下った。出羽国の所領に加え安倍氏の奥六郡をも支配し、強大な勢力を誇っていた。その中で、真衡の支配に不満を持つ一族の吉彦秀武が反乱。真衡は陸奥守の義家に支援を依頼した。真衡は出羽に出陣し、義家は真衡の館を防衛した。秀武が味方につけていた真衡の親族・清衡と家衡は義家を攻撃したが敗退ここで真衡が遠征中に急病で死亡した為、これを機に清衡と家衡は義家に降伏した。義家は許し、奥六郡を二分してそれぞれに与えた。しかしその後家衡の不满がもとで清衡と家衡は対立する。家衡は清衡の館を攻め、妻子などの親族を殺害した。清衡は単身逃れ、義家に援助を求めた。義家は苦戦するが家衡を滅ぼす。清衡は清原氏の旧領すべてを治めることとなり、実父である藤原経清の姓「藤原」に戻しました。ここで後三年の役は終結し、この後100年に渡る「奥州藤原家」が誕生する事になります。